

副作用少ない抗がん剤登場

やまなし

医療最前線

県立中央病院から

《 143 》

副作用が少なく、効果が高いさまざまなタイプの抗がん剤が登場し、がん治療の選択肢が広がっている。県立中央病院は、手術不能な進行肺がんに対し、新たなメカニズムで作用する抗がん剤「免疫チェックポイント阻害剤」を使用。がん細胞を縮小し、進行がん患者の生存期間を飛躍的に延ばす「夢の薬」として注目されている。



筒井 俊晴
呼吸器
内科医長

進行性に効果 選択広がる

非小細胞肺がんの治療薬

1970年代～

2000年代～

2015年～

細胞障害性抗がん剤（プラチナ製剤など）

分子標的薬（イレッサなど）

免疫チェックポイント阻害剤（オプジーボ、キイトルーダ）

副作用が強い

発がんに関与した特定の分子に作用。副作用が少なく効果が高い。対象患者2～3割

免疫細胞を活性化してがん細胞を攻撃。がん細胞の縮小率が高く副作用が少ない。対象患者約3割

た。2000年ごろから、発がんに関与した特定の分子に作用する分子標的薬「イレッサ」（一般名・ゲフィチニブ）が登場。従来の抗がん剤より副作用が少なく効果が高い一方で、対象は全肺がん患者の2～3割に限られている。

免疫チェックポイント阻害剤は、免疫が過剰に働くことを抑制するシステム（免疫チェックポイント）を解除することで、免疫細胞を活性化し

てがん細胞を攻撃する。15年に登場した「オプジーボ」（一般名・ニボルマブ）は従来の抗がん剤で効果がみられない人が対象。16年に承認された「キイトルーダ」（一般名・ペムブロリズマブ）は初期治療から使用できる。

筒井医師は「免疫を活性化する治療なので、全身状態の良好なうちに始めた方が効果的」と話す。キイトルーダは従来の抗がん剤と比べ「がん細胞の縮小率が高く、副作用が少ない。生存期間も飛躍的に延び、夢のような薬」という。対象患者は約3割にとどまるが、同病院ではこれまでに2種類の免疫チェックポイント阻害剤を計56人に投与し、効果が表れているという。また、血液の遺伝子情報から治療効果を予測するゲノム研究にも取り組んでいる。

筒井医師は「抗がん剤治療の幅が広がり、進行がんを治すという希望を持って治療に臨めるようになってきた。『肺がん治療の夜明け』と言って『いい』と話している。

Ⅱ第2、4木曜日に掲載します